

# 郊外都市の隆盛を担った建築家のライフヒストリーとその生産論的分析 —建築家の人格性の生産論的解体をめぐって—

構法計画研究室 土居亮太

## 1. 序論

### 1-1. 研究背景と目的

焦土と化した戦後日本の復興の大きなテーマとなったのは、都市不燃化であり、多くの非住宅建築物は鉄筋コンクリート造や鉄骨造へ置き換えられていった。こうした都市不燃化を進める「量を担う建築家<sup>注1)</sup>」を量産すべく、法整備と教育改革が行われ、大量に育成された設計者・技術者たちは各都市へ輩出され拡散していった（図1）。

「量を担う建築家」は、建築史において無名的に扱われ、戦後の都市と建築家を語る上でその人格性<sup>注2)</sup>は相対的に捨象される傾向にあった。戦前から変わらず、戦後においても「建築家<sup>注3)</sup>」という言葉は旧帝大卒業者をはじめとしたエリートであることを含意しており、都市と建築家の歴史は彼らメインストリームの建築家を中心語られてきた。だが、「量を担う建築家」とみなされてきた彼らも都市の隆盛を担った一人の建築家として代替不可能な存在であったはずであり、これまでの歴史記述は「量を担う建築家」からの視点を欠いてきた。

戦後の都市と建築家を巡る歴史の記述は、個人の人格性を捨象した統計的な視点だけでも、個人を中心とする英雄譚的な視点だけでも、どちらか一方のみでは片手落ちになってしまふ。

本研究では、郊外都市の不燃化の成立と、都市隆盛の過程を、場に個人設計事務所を構える建築家が如何に影響を及ぼしたかという観点から、描き直すことを目的とする。

### 1.2. 研究対象と方法

調査対象は、神奈川県藤沢市に個人設計事務所を構える建築家とする。藤沢市は、1960年頃から藤沢駅を中心とした急速な都市の発展に伴い、都市不燃化が推進された経緯がある。

実施した調査は、主に藤沢市の建築家の活動実態に関する調査と、3人の藤沢市で活動する建築家へのインタビュー調査（2024年9月19日～2025年1月21日）である。調査結果に基づき、歴史記述の方法論として、統計的側面と代替不可能な個別の側面による両面から建築家のライフヒストリーを検討することで、これまで捨象される傾向にあった量を担う建築家の個人史を描き直すことを行った（図2）。そして、3人の語りに基づき、建築家の人格性の解体過程を、労働組織・法・制度・教育や社会経済的な生産基盤の変容との関連といった生産論の中で明らかにするとともに、それぞれの建築家の代替不可能性について考察を行った。

### 1.3. 論文の構成

本論文は四部構成をとっている。

第一部の2章では、建築家の成立過程を概観するとともに、神奈川県藤沢市の建築家を取り巻く状況の変遷に関する量的調査によって、建築家を取り巻く状況をマクロな視点から量的に把握する。

第二部の3章では、藤沢市に個人設計事務所を構える3人の建築家を対象にインタビュー調査を行い、時代の趨勢による統計的な側面と、代替不可能な個別的な側面の両面から彼らの語りを分析する

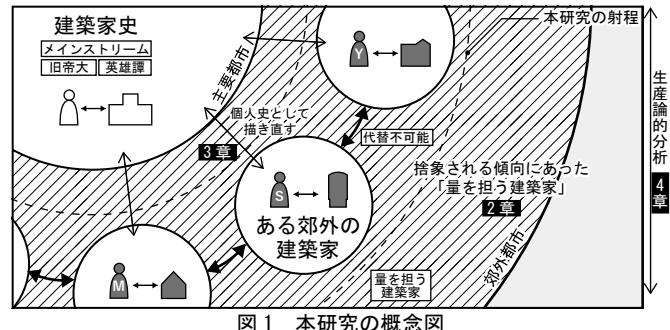


図1 本研究の概念図

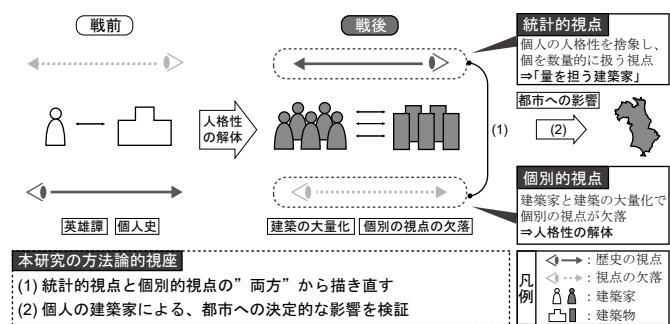


図2 建築家の人格性の解体と研究の方法論の概念図

ことで、建築家の個人史を描き直す。

第三部の4章では、以上で得られた知見から、建築家の代替不可能性に関して再度検証を行う。続く5章は論文の総括であり、研究成果を示すとともに今後の課題について述べていく。

第四部は、補遺としての小説であり、シナリオアプローチにより建築家の代替不可能性の展望を検討する。具体的には、2080年の藤沢市を舞台に、将来の建築家を取り巻く物語を小説として描いた。

### 2. 建築家と郊外都市藤沢の量的把握

本章では、戦後の建築家を取り巻く包括的な歴史の把握と、神奈川県藤沢市の建築家を取り巻く状況を対象とした量的調査による、郊外都市における建築家の生産論的変遷の把握を目的とする。

#### 2-1. 「地場の建築家」の成立過程

##### 2-1-1. 建築家の黎明期

日本における建築家の発生の起源は、明治維新にある。当時の建築家教育は、一部の旧帝大に限定された、閉鎖的な少数精銳の技術者養成を特徴とする。明治期における日本人建築家は、近代国家としての体制が整えられる中で重要となつた、国家的な建物の営繕を担う立場にあり、主に西洋技術の移植という国家的使命を果たすことを期待された<sup>1)</sup>。こうした背景から、戦前の建築家の人格性は建物と一対一で結びいたため、英雄譚として個人史を描く歴史の記述が有効であった。

##### 2-1-2. 焦土と化した都市復興の「量を担う建築家」

第二次世界大戦により、日本の200以上の主要都市が焦土と化し、都市不燃化が戦後日本復興の大きなテーマとなった。日本の都市の多くは木造建築物で構成されていたため、RC造をはじめとした不燃建築物の設計を行う技術者が大量に必要となり、法整備と教育改革が求

められた。戦後の建築家に関する重要な法整備として1950年の建築士法の制定が挙げられる<sup>2)</sup>。そして、戦後にかけて建築家は大量に育成され<sup>3)</sup>、「量を担う建築家」は、都市復興に伴う不燃化ビルや住宅建設のブームに後押しされ郊外や地方へ拡散していく。

以上より、建物と建築家の大量化・大衆化を背景に、建築家が担う建物は特別なものではなくなった結果、建築家の個人の人格性は、特に社会的現象や歴史の記述において、相対的に、解体されていくと推察できる。

### 2-1-3. 「量を担う建築家」から「地場の建築家」へ

郊外や地方に拡散していった建築家は、都市不燃化あるいは再開発の量を担う存在として期待された。そして「量を担う建築家」は、「量」の目標を達成した以後も、「地場の建築家」として地域に根付き、郊外都市の隆盛を担っていく存在となる。

## 2-2. 神奈川県藤沢市の都市不燃化の変遷

### 2-2-1. 藤沢の産業と人口の変移

藤沢市は、神奈川県南部に位置し、1601年に東海道江戸日本橋から数えて6番目の宿場町「藤沢宿」として栄えた。1887年の東海道線開通が後押しとなり町は繁栄するが、1923年の関東大震災によって多大な被害をこうむり、家屋の七割が倒壊し、観光施設はほぼ全て半壊した<sup>4)</sup>。

戦災の影響が他都市に比べて軽微であった藤沢市は、戦後の首都圏への急激な人口集中の受け皿となり、藤沢市は、高度経済成長期に急速に近代化していく<sup>5)</sup>。

### 2-2-2. 戦後近代化の波

藤沢市の発展の最大の契機となったのは、1957年「藤沢総合都市計画」による大規模な都市整備を下地とした1960年代の高度経済成長期の都市開発であり、藤沢駅を中心に急速な近代化が推進される。戦後に藤沢駅南口周辺では商業地域が拡大され(図4)、木造建築物が立ち並ぶ街の風景は一変した。1960年以降は、多数の大型店舗が出店する過程の中で、小中規模のビル群も耐火建築化が進み、木造の建物はRC造へと置き換えられていった<sup>6)</sup>。このとき、個別性の強い駅周辺敷地での大量のビル建設には、「量を担う建築家」が必要であったと推測される。

### 2-3. 藤沢市で活動する建築家の量的把握

#### 2-3-1. 「地場の建築家」が担ったビル群の調査

藤沢市役所が公開している建築計画概要書から、藤沢駅周辺の商業地域に建設されているRC造・S造のビル群の中で、藤沢市内に個人設計事務所を構える設計者が担当した事例を対象に調査を行った(図5)。1975年から1995年にかけては、高度経済成長期とバブル経済期の影響で建設件数が増加する傾向がみられた。

#### 2-3-2. 設計事務所数の統計調査

設計事務所登録のデータベース化以後<sup>注4)</sup>の藤沢市に個人設計事務所を構える設計者を対象に、一級建築士事務所の新規登録数と抹消登録数を整理した(図6)。近年の傾向を概観すると、2009年以降、新規登録数は83で、抹消登録数は101と減少傾向にある。

## 2-4. 小結

2章では、建築家の成立過程の把握と、藤沢市の建築家を対象とした量的調査を行い、建築家の活動と実態を包括的に把握した。

戦前の建築家は、国家的使命を担うエリートであり、英雄譚として語ることが有効なため、個人の人格性は担保されていた。対して、戦後の建築家は、都市不燃化を担うべく、大衆化する過程で、個の重要性が相対的に下がり、個人の人格性が捨象される傾向にあった。

表1 建築系学科・学校と学生・生徒数の変遷

| 学校別     | 1938年 |       | 1958年  |     | 1967年 |        |     |       |
|---------|-------|-------|--------|-----|-------|--------|-----|-------|
|         | 学校数   | 学生生徒数 | 学校別    | 学校数 | 学生生徒数 | 学校別    | 学校数 | 学生生徒数 |
| 大学      | 5     | 161   | 大学     | 39  | 1650  | 大学     | 68  | 4488  |
| 専門学校    | 11    | 284   | (官公立   | 20  | 530   | (官公立   | 25  | 1008  |
| 甲種実業学校  | 60    | 1433  | 私立     | 19  | 1120  | 私立     | 43  | 3480  |
| 乙種実業学校  | 7     | 162   | 短期大学   | 7   | 290   | 短期大学   | 6   | 345   |
| 各種学校(A) | 7     | 167   | 高等専門学校 | —   | —     | 高等専門学校 | 6   | 245   |
| 各種学校(B) | 16    | 255   | 全日制工高  | 95  | 約5300 | 全日制工高  | 206 | 11652 |
|         |       |       | 定時制工高  | 30  | 約1800 | 定時制工高  | 63  | 2837  |



図3 藤沢駅南口周辺の写真(左1956年/右1973年)

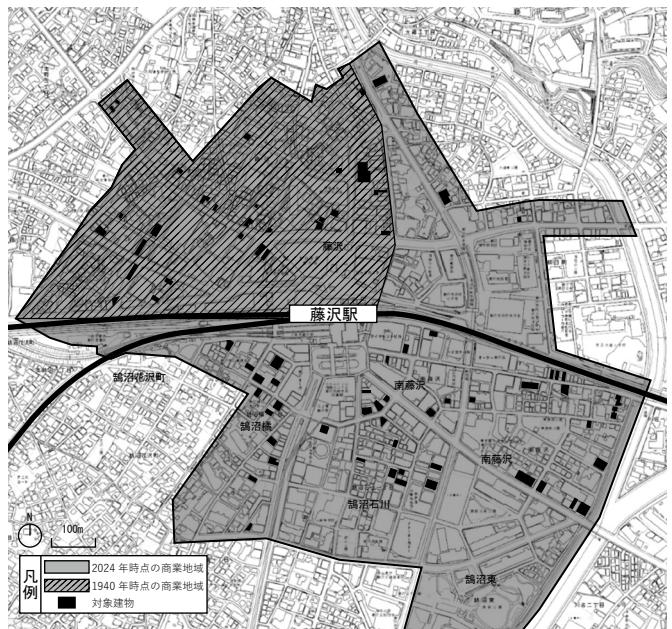


図4 藤沢駅周辺の商業地域と地場の建築家が担当した建物の分布

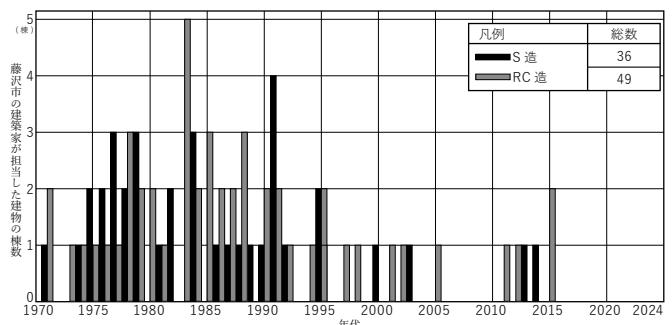


図5 藤沢駅周辺の商業地域で地場の建築家が担当した建物の棟数

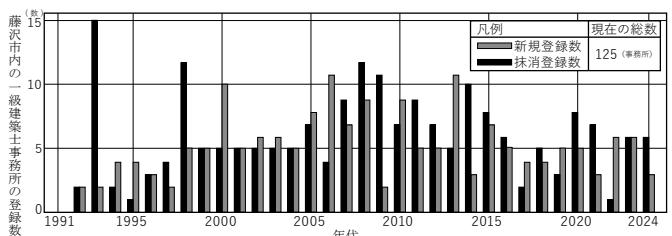


図6 藤沢市内の一級建築士設計事務所の登録数

藤沢市は、高度経済成長期とバブル経済期を契機に、駅周辺の商業ビルを中心とした都市不燃化が進められたことで、民間の建築家が活動できる生産基盤が整備された経緯を持つ。地場の建築家が藤沢駅周辺に設計した不燃化ビルの事例も散見され、戦後の郊外都市の不燃化と再開発に貢献していたことは明らかである。

### 3. 藤沢市で活動する3人の建築家の語り

本章では、藤沢市で活動する3人の建築家へのインタビュー調査を行ひ(表1)、そのあり方についての時代の趨勢による統計的な側面と、代替不可能な個別的な側面の両面から彼らの語りを分析することで、建築家の個人史のアンソロジーとして戦後の藤沢を描き直す(図7)。

#### 3-1. Y氏—戦前生まれの役所の仕事を得意とする建築家

1950年代の工業高校では、戦後復興と高度経済成長期のマス教育化を背景に、主に即戦力となる現場監督を輩出するための建築教育が行われており、高校生のY氏はそうした環境下で建築を学ぶ。独立後は、バブル経済期の好景気に後押しされ、共同住宅や商業ビルなどの中規模の案件を増やしていく、藤沢市の公共建築の仕事も順調に獲得していく。

Y氏が「町医者的な建築家」として、藤沢の発展と、街並み形成に貢献してきたことが明らかになった。具体的には、(1)藤沢市設計監理協会(2)独立当初の津久井町での営繕相談(3)均質化していく街並みに対する応答などである。

#### 3-2. S氏—バブル期を機に民間商業ビルを得意とする建築家

| 項目          | 時代 | 1945          | 1950              | 1955             | 1960                 | 1965        | 1970           | 1975            | 1980               | 1985          | 1990                 | 1995       |
|-------------|----|---------------|-------------------|------------------|----------------------|-------------|----------------|-----------------|--------------------|---------------|----------------------|------------|
| 社会背景        |    |               |                   |                  |                      |             | 1955-72高度経済成長期 |                 |                    | 1986-91バブル経済  |                      | 2005耐震偽装事件 |
| 制度・法律       |    |               | ●1950建築士法公布       | ●1952耐火建築促進法公布施行 |                      |             |                | ●1973第一次オイルショック |                    | ●1981耐震基準改正   | ●1990不動産融資量規制        |            |
| 教育の変遷       |    |               |                   | 教育の量的拡大＝マス教育     |                      |             |                | 質的改善            |                    |               | 個性重視・豊かな人間性の育成       |            |
| 建築界         |    |               | ●1953「テクニカルアプローチ」 | 1960s建築論の興隆      | ●1969「か・かた・かたち」      | ●1974「ノアビル」 |                |                 |                    | ●ボストモダニズム     |                      |            |
| 藤沢市を取り巻く出来事 |    | ●1945年空襲被害は軽微 |                   | ●1957藤沢市総合都市計画   | 1965年建設ブーム→駅前ビル・文化施設 |             | 都市計画による藤沢市の近代化 |                 | ●1970年Y氏事務所独立      | ●1973年S氏事務所独立 | ●1984年藤沢市文書館開館       | バブル経済期     |
| 藤沢の建築家の変遷   |    | ●1940年Y氏出生    | ●1947年S氏出生        | ●1958年M氏出生       |                      |             | 萌芽期            |                 |                    |               | ●1991年M氏事務所独立        | 成熟期        |
|             |    |               |                   |                  |                      |             | 確立期            |                 | 1978年「藤沢市設計監理協会」設立 |               | 1996年「藤沢市設計監理協会協同組合」 | 安定期へ       |

| 統計的な側面 |  | 代替不可能な個別の側面  |  |
|--------|--|--|--|
| Y氏の語り  | (1) 戦後からバブル期の藤沢<br>独立当初の藤沢の状況<br>1970年 高度経済成長期<br>当時はね、藤沢なんてすごい田舎だったもんだから、東京とすごい格差があつてね、地方ですよ。<br><br>(2) バブル経済期の追い風<br>大体、役所の仕事をやるようになると、事務所って軌道に乗ってくるじゃないですかね。   | (2) 建築教育と建築界の趨勢<br>即戦力となる技術者教育<br>建築家じゃない、全体会の雰囲気としては中堅の現場監督さんを養成するのが中心ですから。<br><br>建築論の創設期<br>(建築論)の創設期だと思ったんですね、あの頃はね、やっぱりすごいなと思って、やっぱり発想があって、それが具体的に絆になってしまって、それが素晴らしいことだな。                           | (3) 建築への問い合わせ<br>高校時代の設計への興味<br>それに先生から名社寺建築の知識をたくさん叩き込まれまして、それがいまでもプロポーションとか構成とかの設計に役立っていますね。<br><br>「建築とは」問い合わせの探求<br>我々は高校で十分やってきましたんで、手は早いんですよ、でもやっぱり「建築とは」っていうのがね、やっぱり話をしていると、気後れするなっていうのがね、それが素晴らしいことだな。 |
| S氏の語り  | (4) 建築家としての思想<br>「町医者的な建築家」をめざして<br>藤沢設計監理協会会長 津久井町での営繕相談<br>地元に帰って、コツコツと町医者的な感じでできないかねっていうものもありましたね、小さくていいから、光るものというか街並みに合うものをやりたいなって。<br><br>均質化する街並みに対する応答<br>当時は役所だからって、四角いものが多かったから、四角いものからなんとか崩そうと思って。 | (5) 人生と建築の哲学<br>「人生の師匠」との出会い<br>高校の時にデッサンやっていて和風の建築に興味をもって、表千家に学びに行ったり。そこでの主人が彫刻家の高田博厚。私の人生の師匠。<br><br>デザインに対する射程<br>別に彫刻っぽく作ろうとしてるわけじゃないんだけど、なんかそういう感じになっちゃう。その場所を見てここにはいい感じとか、ヨーロッパ行くとき、やっぱり建物は彫刻的なんだ。 | (6) 多種多様な人脈形成<br>営業センスを養う<br>たってほとんど営業だよ。設計仕事を。仕事がないや自分の技術を生かせない。いくら自分がいいデザインをするからって。<br><br>チャリティーへの積極的参加<br>やっぱり自分のためにやろうと思ったら一生懸命できる。それが絶対人のためになっていく。<br>慈善寄付団体ロータリー藤沢                                      |
| M氏の語り  | (7) バブル崩壊後<br>バブル崩壊渦中の独立<br>自分の仕事でバブルを味わったっていうことはないし、逆にバブルが崩壊してからの事務所の仕事がありこなってきたという経験はある<br><br>(8) 事件・経済変化による影響<br>耐震偽装の事件、その間は全然動かなくなっちゃつたり。その時進めたやつも、許可が進まなくなつて、全然検査機関とか役所も対応してくれなくなつて。すごく大変だった。         | (8) 個人設計事務所の経営問題<br>そういうアトリエ系っていうか、小さな事務所やるのに一番問題なのは、人件費なわけだ。だから単純に毎回同じ仕事でちゃんと同じお金が入るような仕事だったらいけど、そういうない<br><br>(9) 地の利を活かした戦略<br>藤沢の地理的問題<br>片瀬山だったり土砂災害警戒区域のレッドゾーンに入ってるところも結構ある。                       | (10) クライアントに寄り添う<br>建築相談スペースの開設<br>現実問題ってさ、そういうの一個一個全部クリアしていく、設計なんかもちよびっとだからね。もうほんとね、大変なのよ。<br><br>建築家の活動と実践に関する語りの大分類名<br>建築家の語りに関する小分類名<br>建築家へのインタビューから抽出した小分類に関する語りの例<br>統計的な側面<br>代替不可能な個別の側面<br>備考       |

図7 Y氏, S氏, M氏の語りの統計的な側面と代替不可能な個別の側面

表1 インタビュー対象

| 年表 | 建築家Y氏  | 建築家S氏   | 建築家M氏  |
|----|--|---|--|
|    | 1940年 藤沢市生まれ<br>1958年 神奈川県内の工業高校卒業<br>1964年 日本大学理工学部卒業<br>1964-70年 設計事務所勤務<br>1970年 独立 | 1947年 藤沢市生まれ<br>1966年 茶道の表千家に入門<br>1970年 日本大学理工学部卒業<br>1970-73年 設計事務所勤務<br>1973年 独立 | 1958年 東京都文京区生まれ<br>1976年 日本大学ヨット部に入部<br>1980年 日大生工卒業<br>1981-93年 設計事務所勤務<br>1993年 独立 |
| 得意 | 公共建築   | 民間の商業ビル   | 民間の木造住宅  |
| 所属 | 多い時で4人(バブル前期後)<br>→現在は配偶者と自身の2人  | 多い時で10人(バブル経済期)<br>→3人(バブル後)  | 配偶者と自身の2人  |
| 取材 | 取材回数:4回/計12時間  | 取材回数:2回/計5時間  | 取材回数:2回/計6時間   |

S氏は、1973年に藤沢市にて独立した。S氏の事務所が軌道に乗ったのは、バブル経済期の1980年後半からであった。S氏は積極的に営業に出回り、多種多様な人脈を形成し、仕事の獲得へと繋げる。

S氏が、バブル経済期に仕事を獲得してきた背景には、持ち前の対人スキルを活かし、慈善活動などの社会貢献を通じて、民間のクライアントとの関係性を築いた結果であることが明らかになった。

#### 3-3. M氏—バブル期以後の民間木造住宅を得意とする建築家

M氏は1991年に独立し、駆け出し直後に、バブル崩壊に直面する。M氏からは、バブル崩壊をはじめとした、度重なる経済変化による事務所経営の影響が語られた。M氏は、事務所自営における最大の課題は人件費と述べており、配偶者と二人三脚で切り盛りしている。

M氏は、立地条件の悪い敷地の案件を受け、施主に親身になって寄り添うことを大事にすることで、藤沢市でのニーズを獲得し、個人設計事務所を存続させることに成功しており、街の診療所的な立場として貢献していることが明らかになった。

#### 4. 建築家による都市への決定的影響の検証

本章では、建築家を生産論的視点から紡ぎ直し、建築家の代替不可性な都市への決定的影響の検証を行うことを目的とする(図8)。

##### 4-1. 作品と活動経歴

Y氏は藤沢市設計監理協会に設立年から所属し、1994年から2012年まで会長を務め、藤沢市の街並みの保全活動に貢献した。Y氏が藤沢市から初めて受注した「文書館」(1984年竣工)では、家型の公共建築に挑戦し、そうしたデザインは当時の藤沢では珍しかったと語る。

S氏は複数の社会貢献団体に所属し、人脈形成と慈善活動に注力した。藤沢市都市景観賞を受賞した、「Kタワー」(1995年竣工)では、藤沢の都市景観の形成に創造的な視点をもたらした。

M氏は1993年の事務所開設から約200件の住宅を受注しており、身近な建築家へ市民が相談できるサービスを設けるなど、人に寄り添う専門家として実践を行っていた。

##### 4-2. 都市への決定的影響の検証

###### (1) Y氏の「文書館」(1984年竣工)の場合

建物周辺において、「事例①:街並みとの呼応」「事例②:家型タイル」に見られるように、家型の立面が、住宅とビルが混在した藤沢の街並みと呼応し、周辺に影響が波及していると推察される。

Y氏はインタビューで、「当時の公共建築の多くは四角形だった」と語っており、藤沢駅周辺の商業地域を対象に、1984年以前のRC造・S造の公共建築を調査した結果、大半が四角形の立面を採用していた。現存する家型の立面を持つRC造・S造の建物(計17棟)は、すべて1984年以降の建設であることが確認された。

###### (2) S氏の「Kタワー」(1995年竣工)の場合

建物周辺において、「事例①:ツヤ黒みかげ」「事例②:桜みかげ」

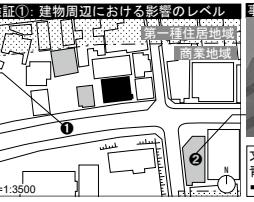
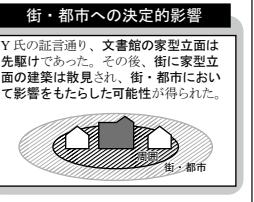
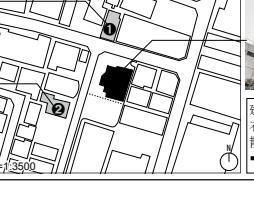
|    | 作品・活動経歴   | 個別的な語り  | 都市への決定的影響の検証   | 検証の結果  |
|----|---|---|--|--|
| Y氏 | <p>文書館(1984年竣工) Y氏初の公共建築<br/><br/>1970年 独立<br/>1978年 藤沢市設計監理協会所属<br/>1994-2012年 藤沢市設計監理協会 会長<br/>1996年 藤沢市設計監理協会協同組合理事長<br/>1999-2003年 藤沢市景観審議委員<br/>2004年～日本建築家協会建築相談委員<br/>2006-2007年 神奈川県建築士会湘南支部部長</p> | <p>均質化する街並みに対する応答<br/>「町医者の建築家」</p> <p>地元に帰つて、コソコソと町医者の感じでできなくなつたのもありましたね。小さてもいいから、光るものという街並みに合うものをやりたいなって。</p> <p>町医者みたいなことが、小さいとかいいから、地域ね、溶け込んだそういうものをやっていけばいいなって。</p> <p>文書館についての語り</p> <p>みんなもう役場だからって、当時としてはね、四角いものを通してやつちやおうっていうのが多かつたから、四角いものからなんとか崩そうと思って。</p> <p>そういう意味で、アトリエの事務所みたいな感じのところでも、役所の仕事になるとこう(四角)なっちゃうところが多くかったです。</p> | <p>検証①: 街並みとの呼応<br/><br/>事例①: 建物周辺における影響のレベル<br/><br/>検証②: 家型タイル<br/><br/>事例②: 家型タイル<br/>文書館竣工: 1984年<br/>青少年会館竣工: 1988年<br/>周辺に影響が波及</p> <p>検証②: 街・都市における影響のレベル<br/><br/>家型立面の公共建築<br/>藤沢駅周辺の商業地域を対象に、1984年以前に建設されたRC造・S造を調査<br/>→現存する建物において、家型立面の建築は見られず、Y氏の証言の信憑性は高い。<br/>【対象範囲】商業地域<br/>凡て文書館<br/>例 ★RC/S造の家型立面</p> | <p>街・都市への決定的影響<br/>Y氏の証言通り、文書館の家型立面は先駆けていた。その後、街・都市において影響をもたらした可能性が得られた。</p> <p>人への決定的影響<br/>Y氏は、藤沢市設計監理協会等の活動を通じて、多くの藤沢の建築家や市役員との協議し、人への影響を与える影響を及ぼしていると推察される。</p>        |
| S氏 | <p>Kタワー(1995年竣工) 藤沢都市景観賞受賞<br/><br/>1974年 独立<br/>1979年 藤沢青年会議所入会<br/>1987年 藤沢東口ターリークラブ入会<br/>2006-2007年 会長に就任<br/>2008年 鎌倉プロバスケットボール入会</p>   | <p>街並み・風景に対する応答</p> <p>別に影刻っぽく作ろうとしてるわけじゃない。目立とうとか、そういう意識は全然なくとも、その場所を見て、ここにはいい感じどう。ヨーロッパに行きやつぱり建物は影刻なんだ。</p> <p>赤坂の御影石のアリバを見たとき、これを設計した人(白井成一)に会いたいなと思った。</p>  | <p>検証①: 建物周辺における影響のレベル<br/><br/>事例②: 桜みかげ<br/></p>   | <p>R曲面の白みかげ<br/>建物周囲にも、御影石を用いたビル群が散見された<br/>→周辺に影響が波及</p>  |
| M氏 | <p>住宅(2000年～竣工) 約200件の住宅を受注<br/><br/>1993年 独立<br/>テレビ東京完成ドリームハウス! 海を望む断崖絶壁の家<br/>2003年7月放映<br/>2010年 稲村ヶ崎ツリーハウス<br/>湘南スタイル 湘南の暮らしと家<br/>2013年11月号</p>  | <p>設計・デザインに対する態度</p> <p>多少リスクがあつても面白い設計をしてくれる人を望んでいます。だからそういう人を相手に仕事をするときは、こういうリスクがあるんですよって、きちんと説明しないといけない。</p> <p>お客様のこと考えると、住宅なんていうのはさ、もうそんなにこだわらなくても、自分の欲と現実をどこで折り合わせか。</p>  | <p>検証①: 建物周辺における影響のレベル<br/><br/>R曲面の白みかげ<br/>建物周囲にも、御影石を用いたビル群が散見された<br/>→周辺に影響が波及</p>   | <p>周辺の建築への決定的影響<br/>R曲面の御影石の使用は独自性に富んでおり、周辺に影響が波及した可能性はあるが、それ以上のレベルでは確認できなかった。</p> <p>人とのつながりへの決定的影響<br/>施主の人生に代替不可能な影響をもたらしたことは推察されるが、周囲・街・都市レベルにおいては、影響の波及は確認できなかった。</p> |

図8 都市への決定的影響の検証プロセス

に見られるように、R曲面の白みかげを用いた、Kタワーの影響が周辺に波及している可能性がある。しかし、1990年代には安価な輸入花崗岩石材が全国的に流通しており<sup>7)</sup>、1995年以前にも御影石を用いた建築は藤沢に散見され、前述した事例は時代的趨勢を反映している側面が強いと推察される。

##### (3) M氏の場合

M氏は、住宅建築が仕事の中心であることと、設計・デザインに対する態度からは、街や都市への影響よりも、個々の施主との対話を重視していたことが推察される。

##### 4-3. 検証結果

###### (1) Y氏の影響

藤沢駅周辺の商業地域において、Y氏による文書館の家型の立面は、RC造・S造の公共建築として先駆的な試みであった。現在の藤沢市内には家型の立面を持つRC造・S造の建築が散見され、Y氏の設計が、都市景観に影響を及ぼした可能性が示された。

また、Y氏は藤沢市設計監理協会での活動を通じて、地域の建築家、建設業者、市役所職員との協議を重ねており、これらの交流を通じて都市形成に間接的な影響を与えたと考えられる。

###### (2) S氏の影響

KタワーにおけるR曲面の御影石を用いた造形は独自性を有し、周辺に石材を用いた事例も見られることから、一定の影響を与えた可能性がある。しかし、都市への決定的影響を示す要素は確認できなかった。

###### (3) M氏の影響

住宅設計を主とするM氏は、個々の施主の生活に大きな影響を与えている。しかし、その影響は個別の建築にとどまり、街や都市への波及は限定的であったと考えられる。

#### 4-4. 考察

3人の建築家の語りと実践の分析を通じて、都市への影響力を検証した結果、Y氏の活動が最も決定的な影響を及ぼした可能性が示された。

文書館の家型の立面が都市に決定的な影響を与えた要因として、(1)再現性の高さ、(2)独創性の高さ、(3)先駆性の3つの要素が挙げられる。S氏が設計したKタワーは、R曲面の御影石を用いた彫刻的な形態により、独創性と先駆性において優れた作品であったが、その特徴的な外装は加工コストが高く再現性に乏しかったため、周辺建築への影響は表層的な外装材の模倣にとどまつたと考えられる。一方、M氏の住宅作品は再現性は高いものの、独創性という点では特筆すべき特徴が見られなかった。

また建築の設計行為だけでなく、建築家や建設業者への教育活動や議論を通じて、間接的に都市へ影響を及ぼす可能性も考えられる。

#### 5. 結論と展望

本研究では、建築家と郊外都市藤沢の発展過程の把握と、藤沢の建築家へのインタビュー調査により、以下のことが明らかになった。

- (1) 建築家と郊外都市藤沢の生産論的な変遷の把握と、藤沢市の都市不燃化に関する、建築家の実態と活動の一端を明らかにした。
- (2) 3人の建築家の語りから、郊外都市における建築家としての活動の実態に迫り、都市の隆盛を担った建築家の個人史を描いた。
- (3) 建築家の個人史を描き直すことで、Y氏が都市への決定的影響を及ぼした可能性が示され、その要因の分析と考察を行った。

本研究では、首都圏内の郊外都市としての一地域の分析調査に過ぎない。そのため、今後の展望として、本研究で提示した方法論により、他の地域において同様に建築家の分析を行うことで、これまで捨象されてきた建築家の個としての側面を照射し、都市と建築家の多面的な関係を明らかにすることが挙げられる。

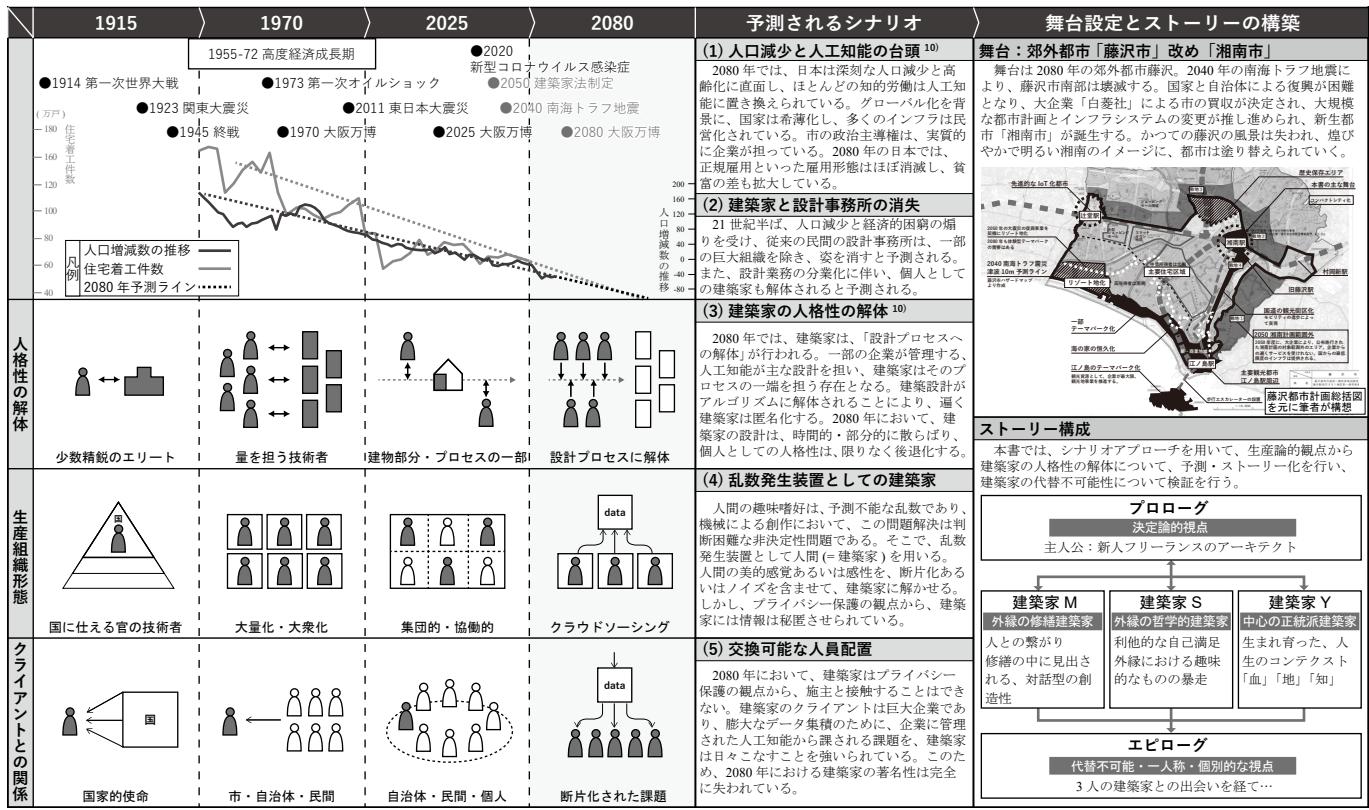


図9 対応表と舞台設定の概要

#### 補遺 あとがき、あるいは、まえがき

本稿では、歴史記述の方法論として、建築家を統計的側面と個別的で代替不可能な側面の両面から描くことで、戦後の郊外都市の不燃化の成立を、これまで捨象される傾向にあった建築家個人の観点から描き直し、建築家の人格性をめぐる問題を提起した。

建築家の作家としての顕名性・無名性をめぐる問題は、本研究が主な対象とした戦後に限らず、現代あるいは、近い未来にも起こりうる問題である<sup>8)</sup>。

戦前の建築家は、国家的使命を担うエリートとして、英雄譚的に語ることが有効であり、彼らの人格性は担保されていた。しかし、戦後の建築家は、都市不燃化を担うべく、大衆化し、各地方へ拡散する過程において、建築家個人の記名性の重要性が相対的に低下し、代替可能な存在として扱われる傾向にあった。現代においては、建築家が建物全体の設計を担う機会は減少傾向にあり、ある部分もしくはプロセスの一端を担う仕事が主戦場に移りつつある。

そして近い未来において、そうした建築設計の断片化は、飛躍的に進歩した人工知能の台頭や、人口減少による設計の需要の低下によって、益々加速し、建築家の個人の人格性は一層解体されると予測できる。そうした社会で、建築家は如何に創造性を發揮するだろうか。個人としての建築家がなお代替不可能な存在であると語ることは可能だろうか。

#### 方法としてのシナリオアプローチ

補遺では、2080年の未来の建築家の代替可能性を検証すべく、シナリオアプローチ<sup>9)</sup>としての小説という手法を用いる（図9）。数量的観点から予測される統計的な舞台設定と、登場人物の個別的な一人称視点から描く小説という手法は、スペキュラティブな未来予測の方法として、一定程度有効であると考えられる。

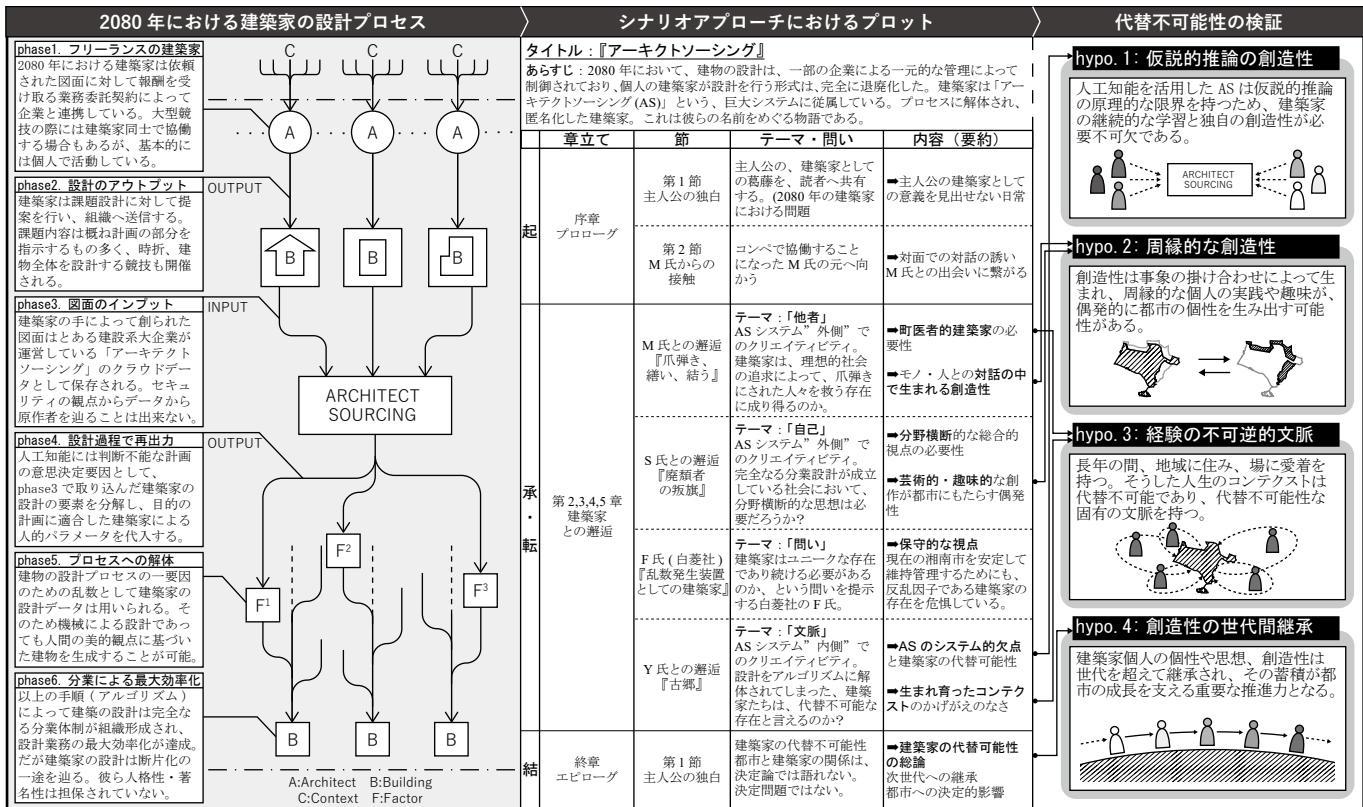


図10 シナリオアプローチによる建築家の代替不可能性の検証

## 2080年世界における建築家のシミュレーション

舞台は2080年の郊外都市藤沢。2080年において、建物の設計は、一部の企業による一元的な管理によって制御されており、個人の建築家が設計を行う形式は完全に廃れている。建築家は「アーキテクトソーシング(AS)」という、人工知能を用いた巨大システムに従属している。建築家は、設計アルゴリズムにおける、機械には判断困難な要素に関わる一種の乱数発生装置として活用されている。プライバシー保護・セキュリティ確保の観点から、建築家には、どの建物のどの部位を担当しているかは秘匿され、特定できないようになっている。プロセスに解体され、匿名化した建築家、これは彼らの名前をめぐる物語である。

## 4つの推論

シナリオアプローチによる検証の結果、建築家の代替不可能性に関する、以下の4つの推論が導出された（図10）。

### ①「仮説的推論の創造性」

人工知能を活用したASは仮説的推論の原理的な限界を持つため、建築家の継続的な学習と独自の創造性が必要不可欠である。

### ②「周縁的な創造性」

創造性は事象の掛け合わせによって生まれ、周縁的な個人の実践や趣味が、偶発的に都市の個性を生み出す可能性がある。

### ③「経験の不可逆的文脈」

長年の間、地域に住み、場に愛着を持つ。そうした人生のコンテクストは代替不可能であり、代替不可能な固有の文脈を持つ。

### ④「創造性の世代間継承」

建築家個人の個性や思想、創造性は世代を超えて継承され、その蓄積が都市の成長を支える重要な推進力となる。

## 総論

以上を通じて、生産論的観点から予測した2080年の世界においても、建築家を一人称視点から描くことにより、個人の存在が都市へ決定的な影響を及ぼす複数の可能性は示され、生産の超高度なシステム化が進んだ時代においても、建築家が代替不可能な存在である可能性が示された。

## 注釈

- 注1) 「量を担う建築家」とは、筆者の造語であり、戦後の都市不燃化政策により、大量化した不燃化ビルの設計を担った建築家を意味している。
- 注2) カント(1724-1804)は、人間が持つ道徳法則の主体としての性質を「人格性(Persönlichkeit)」と定義した。
- 注3) 本研究では、「建築家」の定義を「建築設計に従事する遍く設計者」として扱うものとする。
- 注4) 県庁への情報公開請求を行ったが、設計事務所数の推移は耐震偽装事件を契機とした平成21年のデータベース化以降のみしか把握できず、それ以前の正確な数量の把握は困難である。

## 参考文献

- 稻垣栄三:『日本の近代建築——その成立過程』,丸善,1959
- 速水清孝:『建築家と建築士一法と住宅をめぐる百年』,東京大学出版会,2011
- 日本建築学会:『近代日本建築学発達史』,丸善,1972
- 高木勇夫:『藤沢市:明治・大正・昭和(地図に刻まれた歴史と景観1)』,新人物往来社,1992
- 中島直人:『藤沢駅前南部第一防災建築街区造成の都市計画史的意義に関する考察』,日本建築学会計画系論文集,2013年78巻688号pp1301-1310
- 慶應義塾大学SFC中島直人研究室:『藤沢アーバニズム』,2015
- 乾睦子:『国内の花崗岩石材産業のあらましと現状—「稲田石」を例として—』,国士館大学理工学部紀要5,pp74-80,2012
- 南後由和:『有名性と「界」の形成——建築家の事例分析に向けて』,ソシオロジ,32号pp216-234,2008
- 田崎智宏,金森有子,吉田綾,青柳みどり:『シナリオアプローチの類型とライフスタイル研究への適用性』,シンポジウム論文,2014年27巻1号p.32-42
- 東浩紀,桜坂洋:『ギートステイト』,2007